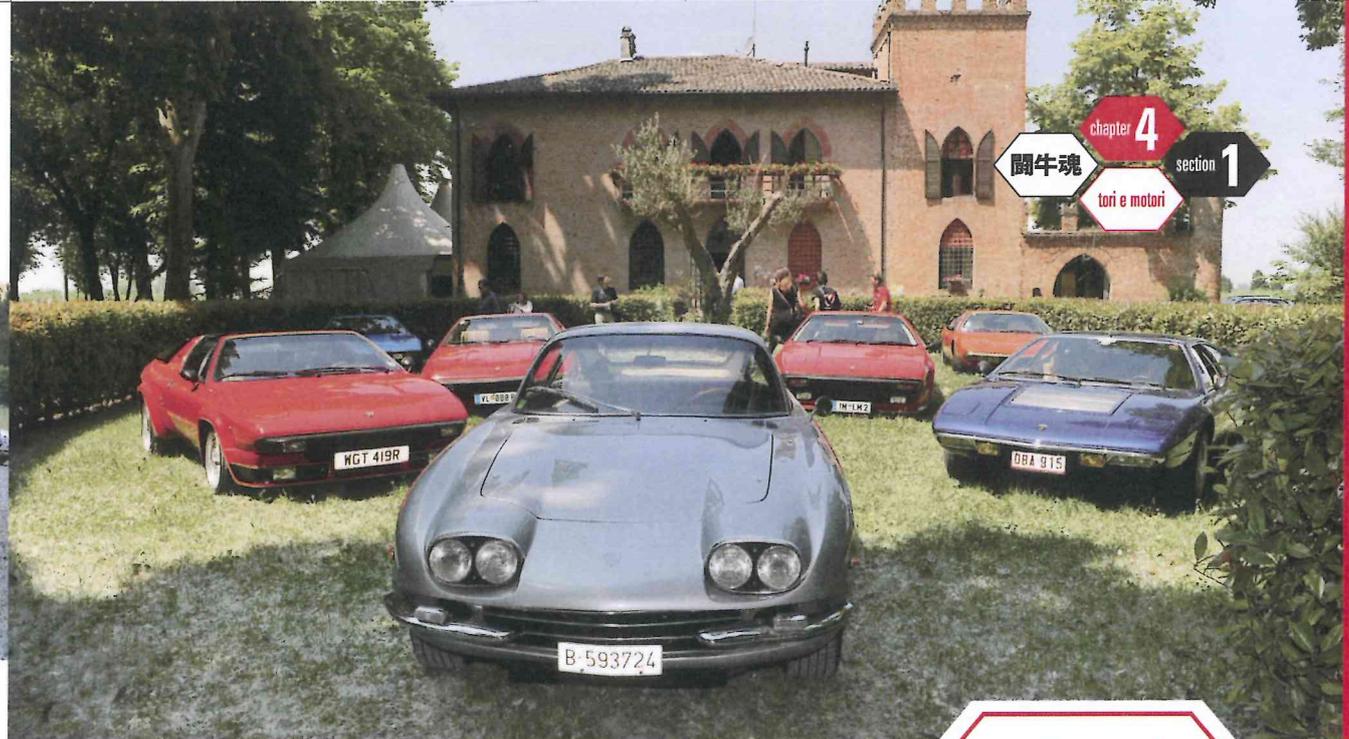




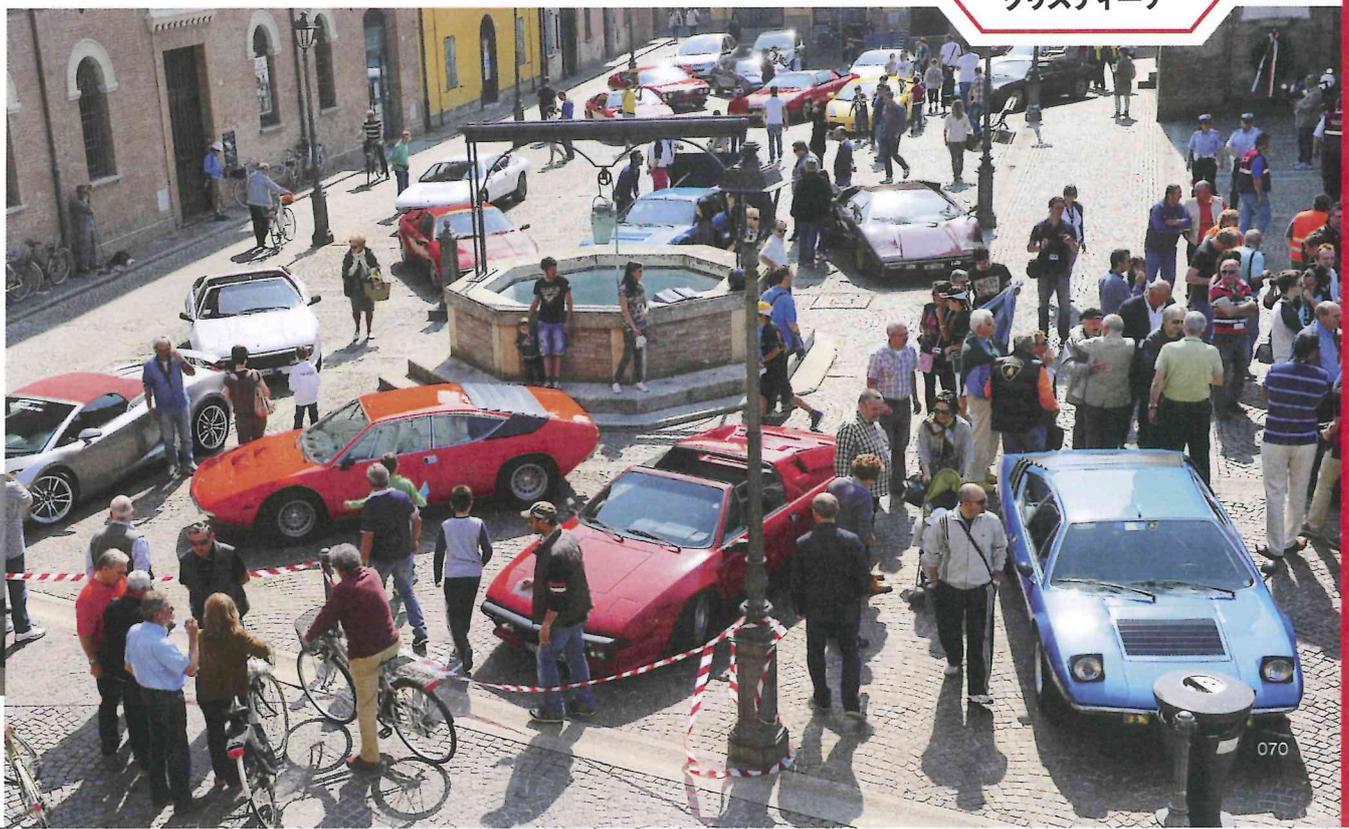
chapter 4
 闘牛魂
 section 1
 tori e motori



ランボルギーニに対して抱いていた40年来の疑問。
 その疑問に終止符を打つべく、トリー・エ・モトリー主催のイベントに、日本からはるばる参加。
 長年の疑問が晴れた瞬間だった。

文●丸森信裕と旅の仲間たち 写真●ガエルティエロ・ナルディ / 丸森信裕
 text by MARUMORI Nobuhiro & freinds of the trip photos by Gualliero Naldi & MARUMORI Nobuhiro

tori e motori
V8 meeting
 ありがとう、
 クリスティーナ





トリー・エ・モトリー・
クラブハウス



私

の手元にこのイベントの情報が届いたのは、昨年のクリスマスシーズンに入ろうとしている頃だった。企画立案者はクリスティーナ・グイツァルデイ。現在、ランボルギーニ・ミュージアムに勤務している女性だ。彼女のランボルギーニへの愛情は筋金入りである。そして彼女は、こう言いつつ憚らない。「現在ランボルギーニがあるのは創立当時の熱い人達の努力にほかならない」と。そして彼女はいつもこう語る。「ランボルギーニの創世記に立ち会った彼ら達が、情熱を持ってランボルギーニの名前を世に送り出した。だから、もつと彼らにフォーカスして、彼らの業績に光を当てたい。そして、ランボルギーニの『魂』を皆に伝えたい」と。そんなクリスティーナは、日頃から、ランボルギーニの黎明期を知る人々とのネットワークを大切にしている。フェルツチオにランボルギーニ設立当時に集められた気鋭の若手二人のエンジニア、ジャンパオロ・ダララ、パオロ・スタツァーニ、世界に数々の衝撃を与えた天才デザイナー、マルチェロ・ガンディーニ……。フェルツチオの下で、ランボルギーニを支えたこれらの人々、そして名前は表には出てこない大勢のランボルギーニのスタッフたちをクリスティーナは誰よりも大切に思っている。

トリー・エ・モトリー。数年前にクリスティーナが友人と立ち上げたランボルギーニを愛する人達のクラブの名称だ。去年、なんと彼女は自費でクラブハウスを作ってしまった。イベントの前夜祭はこのクラブハウスで行われた。トリー・エ・モトリーのこのクラブ

ハウスを訪れるのは初めてだった。ランボルギーニ本社前を走る道路沿いにあるこのクラブ、まさしくイメージしていた通りの建物だった。

クラブハウスの中に飾られているもの、置かれている物、全て手作りだ。クラブハウスに足を踏み入れると、ランボルギーニが愛されていることをひしひしと感じられる。これらはトリー・エ・モトリーの会員たちが持ち込んでいる。会員は元社員が多いので、自分のランボルギーニとの歴史を持参することが多いのだとか。

たとえば、カロッツェリア部門で働く現役の社員であるアルナルドは、入社して初めての仕事がウルフカウンタックだったというから興味をそそく。実車を前にクルマの作り方をこまかく教えてくれた。クラブ内には彼が作ったミチュア、ジオマが飾られていたが、実際にランボルギーニを叩いている彼だからこその出来る作品だ。

テストドライバーのアントーニオは、いつもヴァレンティノの横で運転を学んでいたと言う。ある日、ヴァレンティノとパネローラの辺りでテストしていた時のこと。なんと、沿道にフェルツチオが立っていたという。フェルツチオ曰く、懐かしいランボルギーニのエンジン音を聞いて思わず往来へ飛び出して来たそう。それから皆で彼の農園に行き、そこにある彼のクルマのコレクションを見せてもらった。フェルツチオは久しぶりの再会でよほど嬉しかったのだろう。コレクションしているすべてのクルマのエンジンを回し始めたそう。大きな農園に鳴り響くその時のランボルギーニのエンジン音を思い出すと、今でも鳥肌が立つと言っ



クラブ員のハンドメイドの置物などがズラリと並び、自らランボルギーニの歴史を一言に製した人も。



サンタアガタポロネーゼから
フェルッチオの生誕地へ



本当に鳥肌が立っている腕を見せてくれた。

プラスチックのお皿に紙コップ。皆で用意した料理。トリー・エ・モトリーにびっつりの夕食会だ。それぞれのテーブルで各々のランボルギーニの思い出話で盛りあがる。疑問に思っていたことを訊ねると、「うーん、その担当は誰だったかな」と、随分昔のことなので、皆の記憶も曖昧である。当時の「事実」は記憶の中で変化してしまっているのだ。「あれ、それは違うのでは？」と思うことも多々あった。しかし、そんな間違いなんてどうでもいい、彼らと居るとそれだけでランボルギーニの世界に浸れるのだから、もう、最高だ。こうして前後祭の夜は更けていった。

翌朝、ホテルの駐車上にはランボルギーニの8気筒が集まっていた。ウラッコ、ジャルバ、シルエットだ。いつもミウラやカウンタックの花形に主役を譲り、彼らは脇役としてランボルギーニを支えていた存在。しかし、今回は違う。彼らが主役なのだ。

トリノから家族で参加のダヴィデはオレージのウラッコ2500Sで参加。今回、奥さんと二人の息子さんと4人でウラッコに乗っての参加だ。数年前までウラッコ2000だったが、最近2500Sを見つけ買い替えたという。ベルギーから参加のPierre Sarrée氏は、70年代にウラッコと出会い、恋をしてしまった。しかし自分では決して手に入れることが出来ないクルマと諦めていたそうだ。しかし、偶然にも念願のウラッコを手に入れ、2500から3000に買い替えたという。

これらのランボルギーニ達が運んで、サンタアガタポロネーゼの中心へ。途中、道に迷ったものの、ようやく会場に到着すると、既にたくさんの方がカメラを持って待ち構えていた。

さすがは主催者のクリスティーナ、今回の8気筒の祭典に集めたのはクルマだけではなかった。なんと、ランボルギーニに関わっていた元社員を壇上に集め、ひとりひとりを私たちに紹介してくれたのだ。何年に入社、どの部門で働いていたか、ランボルギーニの思い出……なせとなど。

カタログを制作していた人、工作機械部門で働いていた人、サービスセンターで働いていた人、前社長のグレコさん、そしてランボルギーニのキーマン、スタンツァーニ氏、その他大勢。ランボルギーニを陰で支えて来た人達が次々にマイクで紹介され、彼らに最高の光が当てられたひとときだった。

その後、以前カタログ写真に使われていた本社近くのレストランへ。レストランの前に車を置くことまで昔のカタログを再現しているかのようだ。

次はランボルギーニの生誕地、レナッツォへ。モニメントが飾られている広場にはランボルギーニ・トラクターが展示されていた。ランボルギーニの歴史は1947年のトラクターから始まったのだ。ここではフェルッチオの甥、ファビオが出迎えてくれた。なんと今回、フェルッチオの息子トニーノ氏も登場。だんだんと父親に似て来たよう……。ランボルギーニの血は確かに続いている。

フェルッチオの生誕地にはランボルギーニ家のお墓もある。もちろん参加



クリスティーナは、これまで表舞台に出てこなかったランボルギーニ関係者をひとりひとり丁寧に我々に紹介してくれた、感謝。



ムゼオ・フェルッチオ・ランボルギーニ



者達で墓参り。フェルッチオのお墓はい
 たってシンプルだ。墓の正確な場所が
 分からないと迷ってしまうほど。しか
 しその普通さがかえって親近感を感じ
 る。久しぶりに親戚のおじさんの墓参
 りに来た、そんな感じだ。墓前には
 トーナが父に送った言葉が刻まれてい
 た。「新しい天国の家でも良い仕事を
 してくれ」と。

3日目は、移転したばかりのムゼオ・
 フェルッチオ・ランボルギーニを訪れた。
 以前のミュージアムに比べるとかなり
 広々としたスペース。ゆったりとフェ
 ルッチオの世界を堪能することが出来
 る。広い空間で見えるフェルッチオの大
 きな写真は迫力がある。彼の眼差し
 がミュージアム全体に行き届いているよ
 うだ。今回エスパーダのプロトタイプ
 に乗せてもらって、思い出をひとつ増
 やした。

当時のランボルギーニ社を再現した
 部屋もある。これからいろいろなアイ
 デアでフェルッチオの世界を展開して
 くれることだろう。サンタガタを訪
 問の際は是非こちらまで足を伸ばし
 てもうひとつのランボルギーニを知っ
 て頂きたい。

40年以上前からランボルギーニを
 追っている者として、今回のイベント
 に参加出来たことは新しい発見の連続
 だった。少年時代、雑誌を通じて知っ
 たランボルギーニの世界。ランボルギー
 ニを知れば知るほど、自分の中で小
 さな疑問が沢山芽生えて来た。その
 答えはどんなに頭で考えても導き出せ
 るものではない。

40年以上ずっと持ち続けて来た疑

問。その疑問を目の前に居る人達に
 ぶつけることによつて、ひとつずつ解い
 ていった。もちろん、答える側の記憶
 は確かなものではなくなっている。し
 かし、お互いに40年前に戻つて語り合
 ったことが必要だった。今回、世界各
 地から集まった同じ「魂」に心を奪わ
 れた者同志、心の交流がかわされたの
 だ。疑問に対する答えはひとつでは
 なかった。事象はひとつかも知れない
 けれど、それに関する感じ方は人そ
 れぞれ、なんとなく肩の荷がおりた。
 クルマを作りたいと思つた人、それ
 を設計図に起こした人、二次元の物
 を3次元にした人、資金を工面した
 人、宣伝した人、販売した人、それ
 を買った人、そして現在、その世界
 を支えている大勢のファン……。【物】
 があるところには、必ず人間の【意志】
 が存在することを実感した。

改めて、ランボルギーニの世界を知
 る素晴らしいイベントを企画してくれた
 クリスチャーナに感謝。40年以上、私
 の心の中に鎮座しているランボルギー
 ニ。そのランボルギーニを世に出して
 くれた人達に直接感謝の意を伝える
 ことができて、ホッとした。

一番心に残ったのは、パオロ・スタン
 ツァー氏から、「君たちのような人
 がランボルギーニを支えてきてくれた
 から、今のランボルギーニがあるんだ
 よ、ありがと、感謝するよ」と声
 を掛けられたことだった。子供の頃か
 らスーパーカーを追い続けて来た私た
 ちにとって、これは最高の言葉ではな
 いだろうか。この言葉を胸に、これか
 らも自分が出るやり方で、ランボル
 ギーニ、そしてスーパーカーの世界を支
 えて行こうと心に誓った旅だった。®



移転したムゼオは、広くて開放的。ランボルギーニの本社館でした後は、是非立ち寄ってみたい。



chapter 4
 section 2
 闘牛魂
 tori e motori

tori e motori
V8 meeting
 —参加車両一覧—

V8だけの集まりであったが、あのミムランのカウンタックが参加するなど、充実した車種が勢揃い。どのクルマもランボ愛に溢れていた。

文●丸森 信裕と旅の仲間たち 写真●ヴァルティエロ・ナルディ / 丸森 信裕
 text by MARUMORI Nobuhiro & freinds of the trip
 photos by Gualliero Naldi & MARUMORI Nobuniro



Silhouette

URRACO P250



Espada

JALPA



350GT2+2



URRACO P300



URRACO P250



URRACO P200



Countach LP5000QV



URRACO P300



JALPA



URRACO



Gallardo



URRACO P300



URRACO P250S



JALPA



Gallardo Spyder



URRACO P250



JALPA



URRACO P300